

に、大宮の内まできこゆあびきすとあこと、なふるあまのよび聲云々。鹽木は此浦に古歌多し。

新後拾 崇全法師 わすれなよ度をかさねて鹽木つむあこぎが浦になれし月影 同接察  
使公敏いかにせんあこぎがうらに袖ぬれてつむや鹽木のからきおもひを。

〔書言字考節用集一乾坤〕二見浦勢州度

〔伊勢參宮名所圖會五〕二見浦

二見は、清き渚打越濱の邊りの總名にて、此を立石といふは、注連はりし二つの石に付ていへり、二見の名義説々あれども、悉く信するに足らず、沙の干ねれば、いろ／＼貝を拾ひ藻を取、ある時は網引などして、あまのしはざとも甚興あり、

或は立石の注連は、興玉の拜所にて、遙沖の大成岩の沙干にも見へぬ岩神あり、是猿田彦にて、わだつみの神也云々、されどもわだつみは、日本紀に海童と書いて、たゞ海の神を拜する成べし、猿田彦といふには及ぶべからず、又磯の砂珊瑚砂と號るものうち交りて、實に珊瑚に似たる石あり、又旭に富士を見る事、參詣記に云がごとし、日の地下を離んと欲する間は、全く見へて、景情尤心を澄せり、

阿胡浦  
志摩國

田駿子河國

二見浦

〔萬葉集一雜歌〕幸子伊勢國時、留京柿本朝臣人麿作歌、  
嗚呼兒乃浦爾船乘爲良武媼、媛等之珠裳乃須十二四寶、三都良武香、

〔日本書紀三十持統六年五月庚午御阿胡行宮時進贊者紀伊國牟婁郡人阿古志海部阿瀬麻呂等兄弟三戶復十年調役雜徭、

〔蓮步色葉集多田子浦駿河〕

〔書言字考節用集一乾坤〕田子浦續日本紀作田原郡